一般演題（口頭）66　11月5日（日）13:35～14:35　第8会場

薬薬連携・地域医療

5-8-066-2 抗がん薬用トレーシングレポートの普及と活用への課題 ～日本医療薬学会学術第一小委員会～

山本　圭祐[1]、清水　久範[2]、月岡　良太[3]、川口　崇[4]、加藤　肇[5]、辻　大樹[6]、山口　拓洋[7]、鈴木　賢一[8]

[1] 聖隷浜松病院薬剤部、
[2] がん研究会有明病院薬剤部、[3] 株式会社アインホールディングス医薬運営統括本部医療連携学術部、
[4] 東京薬科大学薬学部医療実務薬学教室、[5] 薬局しなやく、[6] 静岡県立大学薬学部臨床薬効解析学分野、
[7] 東北大学大学院医学系研究科・医学部医学統計学分野、[8] 東京薬科大学薬学部臨床薬理学教室

【目的】
多岐に渡る抗がん薬の有害事象に適切に対応するためには、病院と薬局の連携が必須である。本研究は、病院・薬局薬剤師がシームレスで行うがん薬物治療の有害事象マネジメント支援体制の構築を目指し、発足された日本医療薬学会学術第一小委員会活動の一環として、トレーシングレポート（以下 TR）の普及と有効活用への課題を明らかにする。
【方法】
2022 年度に開催された東京都がん薬物療法協議会に参加した保険薬局薬剤師を対象として、無記名、自由参加形式にて Google フォームを用いてアンケート調査を実施した。調査項目は、経験年数や認定資格の有無等の基本情報、有害事象評価や TR 作成に必要と思われる情報、および医療機関との情報交換のしやすさ等に関する項目とした。
【結果】
対象薬局は 208 施設、参加した薬剤師数は 336 名であり 62 名から回答を得た（回収率 18.4%）。薬局での勤務経験年数は 5 年未満、5-9 年、10-14 年、15 年以上が各々 5 名、12 名、14 名、31 名であった。62 名のうち 37 名（59.7%）が CTCAE での有害事象評価に困難さを感じていた。TR を作成したことがある 33 名のうち、20 名（60.6%）が作成を難しいと回答し、報告すべき有害事象の判断に迷うと回答した。また、18 名（54.5%）が TR に対する医療機関の対応が不十分と回答し、25 名（75.8%）が情報不足で十分な対応ができない経験があると回答した。一方で、27 名（81.8%）が、TR が治療に活かされた経験があり、かつ 31 名（93.9%）が、患者満足度の向上に繋がっていると回答した。
【考察】
TR の普及の課題として、有害事象評価の困難さ、TR 作成のための情報不足が挙げられ、医療機関の対応も検討の余地があると考えられた。一方で、TR の活用により患者満足度の向上に繋がる可能性が示唆された。本研究ではアンケート回収率が低く、対話を含む本質的な議論を重ねることで、抗がん薬用 TR の普及と活用への課題を明らかにしていく必要がある。